

ジャコビアン・コメディが描く不妊と非規範的な家族

木村明日香

1. 序

宗教改革によるカトリック独身主義からの脱却とプロテスタント的友愛結婚への移行というイデオロギー的転換のさなかで、結婚の再評価は「産めよ、増えよ」という聖書の文言を根拠の一つとした。結婚と生殖が密接に結びついた社会において、不妊はどのように表象されたのか。

本稿ではトマス・ミドルトン作『チープサイドの貞淑な乙女』(1613年初演)におけるキックス夫妻の不妊表象を当時の宗教的、社会的、医学的文脈の中で論じる。演劇における不妊表象は1590年代から見受けられるが、本作は同時代のロンドンを舞台に諷刺性や喜劇性を交えながらも、当事者の苦悩や葛藤を丁寧に描出している。近年の批評は不妊表象がもたらす解釈の豊かさや攪乱性に関心を寄せてきたが、当時の歴史的背景は十分に検証されていない。まずは当時のジェンダー規範、血統主義、婚姻制度のはざまで不妊の夫婦が抱えた問題を整理する。次にこうした問題をミドルトンが巧みに劇化し、キックス夫人とタッチウッド兄の姦通という《社会的療法》を喜劇的に描いていることを論じる。最後にサー・オリヴァー・キックスの意外な申し出に着目し、本作が父権的血統主義の虚構性を暴き、経済的類縁関係に基づく新しい家族像を提示していることを指摘する。

2. 不妊をめぐる諸問題と袋小路

初期近代イングランドにおいて、不妊は信仰、社会的地位、家系存続に関わる重大な問題であった。まず聖書では子が神の祝福 (blessing) として語られ、アブラハムとサラをはじめ多くの不妊の夫婦が子を受かるが、ルターが女性の出産を原罪の贖いとみなしたことも相まって、不妊はしばしば祝福の欠如や罪深さと結びつけられた。また女性にとって妊娠・出産は妻や母親たちの共同体に参加するための通過儀礼であり、跡継ぎを生むことは妻の重要な務めとみなされたが、不妊はそうした機会の逸失を意味した。男性にとっても不妊は深刻な問題であり、生殖能力への疑念が男性性を傷つけるとされたほか、家系存続をめぐる重大な危機を招くこともあった。

中でも跡継ぎの不在は重大な問題であったが、不妊にはそれが家系存続の危機を招く場合であっても、婚姻無効による解消の根拠にならないという難しさがあった。イングランドでは宗教改革後も教会法の多くとそれを管轄する教会裁判所が維持され、有効な結婚を解消して再婚を認める現代的な意味での離婚が19世紀半ばまで一般的に制度化されなかった。このため夫婦が婚姻関係の解消を望む場合は、婚姻が最初から無効であることを認められるか (annulment)、婚姻が有効とされた場合は別居を勝ち取るか (separation) の二択であった。婚姻無効の根拠のうち、不妊に近いのは性交不能 (impotence) であるが、その焦点は子ができないことではなく、あくまで性交渉が行えないことにあった。また性交不能の場合でも婚姻無効による解消が極めて例外的であったことは、フランセス・ハワードとその夫エセックス伯ロバート・デヴァルーの悪名高い訴訟から窺える。R. B. Parker は Essex と Kix の名前の類似性を挙げ、ミドルトンがこの訴訟からキックス夫妻の不妊表象の着想を得た可能性を指摘している (xxxiv)。キックス夫妻は跡継ぎの不在という問題を抱えており、これは恋人との再婚を望んだハワードの動機よりも深刻にみえるが、彼らは性交不能ではなく不妊であるため、婚姻解消という最後の手段に訴えることができない。また結婚当初から関係が冷え切っていたエセックス夫妻と異なり、キックス夫妻は互いに愛し合い性交渉も成立している規範的な夫婦であるがために、法律上の手立てから締め出されてしまっているのである。

こうした不妊特有の難しさは神学者の意見の不一致にも窺える。Henry Smith は子が生まれる見込みのない結婚を「十分に正当とはいえない」(11)と述べるが、William Perkins は「不妊の場合は結婚が解消されるか」という問いに「否」と答えている。サラのように絶望的と思われた時でさえ、神は何度も治癒を施してきたからである (117)。このように聖職者の意見すらも一致しない中で、夫婦たちはいつ訪れるともしれない祝福を待ちながら、社会的な名誉や家系存続の危機といった現実問題に対処する必要に迫られたのである。

3. 『チープサイド』が描く規範的家族像とキックス夫妻の苦悩

ミドルトンはこうした不妊をめぐる問題をどのように描いたのか。劇中のロンドンでは実際と同じく結婚と生殖が不可分に結びついた社会であり、登場する4組の夫婦のうち、キックス夫妻以外はみな少なくとも表向きは夫婦と子供で形成される規範的な家族にみえる。キックス夫妻の視点に立てば、規範的家族像から逸脱しているのは自分たちだけという状況であり、彼らの苦悩はこうした社会的構造の中で理解する必要がある。

キックス夫人の第一声は ‘O, that e’er I was begot, or bred, or born!’ (II. 1. 118) という嘆きで、妊娠・出産への切望を表している。また彼女は自分たちの嘆きが通行人に聞かれぬよう ‘Hist!’ (II. 1. 124) と口止めをするが、これは不妊

の夫婦が抱える疎外感や羞恥心を表現する巧みな演出である。妹による双子の出産も彼女にとっては苦痛の種でしかなく、こうした社会的圧力はオールウィット夫人の出産祝い (gossiping) でも示される。「母として子を生むこと」(‘motherly bearing’ (III. 2. 77)) が共同体を挙げて祝福される一方で、キックス夫人の逸脱もまた可視化されるのである。不妊は夫のサー・オリヴァーにとっても深刻な問題である。彼は裕福なジェントリーであるが、跡継ぎがいないため、このままでは親戚の放蕩貴族サー・ウォルター・ホアハウンドに財産が継承されてしまう。しかし彼を最も苦しめるのは、本来良好な夫婦関係に亀裂が生じていることである。他の夫婦が利害や性愛で結びつき、友愛と無縁であるのに対して、キックス夫妻は激しい口論を交わしながらも互いを ‘sweet’ と呼び合うなど、肉体的・精神的な絆が強固である。これは当時の医学書において愛情の欠落が不妊の一因とされたことをふまえると興味深い。キックス夫妻は愛情があるのに身ごもらないという点で、不妊の夫婦が抱える苦悩を際立たせるだけでなく、その原因を夫婦関係の不全に還元する当時の医学的言説の不十分さを示すのである。

不妊がもたらす困難を解消するため、キックス夫妻は医学的療法と宗教的療法を試してきた。当時の産科学では体液の不均衡と熱不足が不妊の根本的原因とされたため、彼らの処方箋はこれを緩和するものと推測される。さらにサー・オリヴァーは病院建設などの慈善事業にも力を入れている。彼は善行が胎の実りをもたらすことを期待しているのである。不妊治療に大枚をはたく姿はサー・ウォルターの浪費と重なるようにみえるが、彼は財産の多くを公共の利益に投じており、これはサー・ウォルターが私欲のために愛人を囲うのとは明らかに異なる経済活動である。サー・オリヴァーが共同体のための支出を行うことは、結末を論じる上で重要な鍵となる。

4. 《社会的療法》と家族像の再編

伝統的療法が実を結ばない中、第3の道として提示されるのがタッチウッド兄による《社会的療法》である。彼は弟の恋路を助ける策の一環としてキックス夫人を妊娠させる。キックス夫妻とは対照的に、タッチウッド兄夫妻は子沢山のあまり窮乏し、別居を余儀なくされているが、こうした富と子供の不均衡は二組の夫婦が交差することで解消に向かう。その媒介となるのがタッチウッド兄の「薬水」(‘water’ (II. 1. 175)) である。作中では彼の精液を指すが、当時の女性たちは不妊に利く ‘water’ のレシピを実際に共有していた。この点をふまえると、タッチウッド兄を連れてくるのがキックス夫人の侍女であることは示唆的である。出産祝いでキックス夫人を疎外してみえた女性たちの連帯が、ここでは彼女の悲願を叶える助けとなるのである。

さらにミドルトンにはキックス夫人の姦通による妊娠を、女性に不妊のスティグマを負わせる社会に対する反動として描く。作中では不妊がしばしばキックス夫人の性質として語られるほか、サー・オリヴァーも自身の精力に問題があることを知りながら責任を妻に転嫁する。さらに ‘I’m master of this house’ (III. 3. 78) と家父長的権威を振りかざし、離婚して娼婦に跡継ぎを生ませるなどと述べ、結婚で財産権を奪われた妻を追い詰める。先述のとおり不妊は婚姻解消の根拠にはならないため、こうした脅しは空虚であるが、キックス夫人にしてみればタッチウッド兄との姦通は、婚姻関係の危機を回避するための必要悪であり、法的権威と経済力を振りかざす夫に対する報復でもある。かくしてキックス夫人は妊娠し、サー・オリヴァーは ‘I am a man for ever!’ (V. 3. 1) と叫ぶが、この歓声は意味内容とは裏腹に男性性と生殖能力を結びつける言説を空洞化する。また父権的な血統主義もその虚構性が暴かれる。サー・オリヴァー（騎士）の家名を継承するのはタッチウッド兄（紳士）の血を引く子供であり、キックス夫人が生んだ私生児は嫡子として育てられ、父親の家督と財産を相続する権利を与えられるのである。

その上で興味深いのは、サー・オリヴァーが男系相続にそれほど執着していない点である。彼はタッチウッド兄の「治療」を受ける前、跡継ぎの男子ではなく可愛らしい女子を思い描く。跡継ぎの問題はサー・オリヴァーにとって重要なはずであるが、彼は男系相続の原理に徹し切れていないのである。伝統的な家父長像から逸脱したサー・オリヴァーは結末で、新しい家族像を提示する役割を担う。彼はタッチウッド兄への謝礼として、彼の妻と子供たちを養うための経済的支援を申し出る。こうしてタッチウッド兄夫妻は再び同居し始め、サー・オリヴァーは彼らの子供の養父となる。いわば二つの家族が血のつながらない父親の庇護のもと拡大家族となるのである。こうしてキックス夫妻の不妊という逸脱は、姦通というさらなる逸脱によって表向きは解消され、夫婦と子供という規範的家族像に回帰する。しかしそれを支えるのは封建的な血統主義ではなく、近代的な経済的類縁関係である。不妊の夫婦を媒介として規範的家族像の虚構性は暴かれ、新しい家族像が可視化されるのである。

5. 引用文献

Middleton, Thomas, *A Chaste Maid in Cheapside*, ed. by Richard Dutton (Oxford University Press, 1999).

——, *A Chaste Maid in Cheapside*, ed. by R. B. Parker (Methuen, 1969).

Perkins, W[illiam]., *Christian Oeconomie* (London: by Felix Kyngston, 1609).

Smith, Henric, *A Preparative to Mariage* (London: by R. Field for Thomas Man, 1591).